

# RDB植物種からみた半自然草地の重要性と、北の原における数種の動態

島根県立三瓶自然館 井上 雅仁

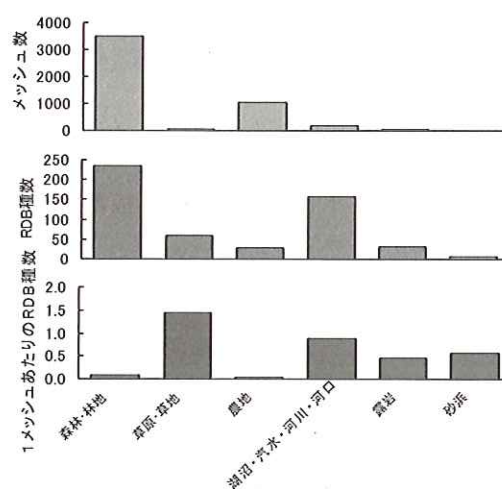
## 1. はじめに

半自然草地（二次草原）は、野焼き、放牧、採草など、人為によって維持されてきた草地（草原）であり、近年では、絶滅の恐れのある動植物が数多く生息するなど、生物多様性を保全する上で重要な生態系であることが認識されつつある。その一方で、重要性・希少性の評価については事例が少なく、とくに都道府県単位といったローカルな範囲での検討は大きな課題と考えられる。そこで島根県内において、生物多様性保全の面から草地がどれほど重要な環境であるのか、絶滅危惧種の現況をまとめた書物「レッドデータブック（RDB）」を用いて評価を試みた。また、三瓶山で刈り取りにより維持されている北の原草原で、RDB種の繁殖状況などを調査しており、これまでの結果を報告する。

## 2. 方法と結果

### (1) レッドデータブックを用いた重要性評価

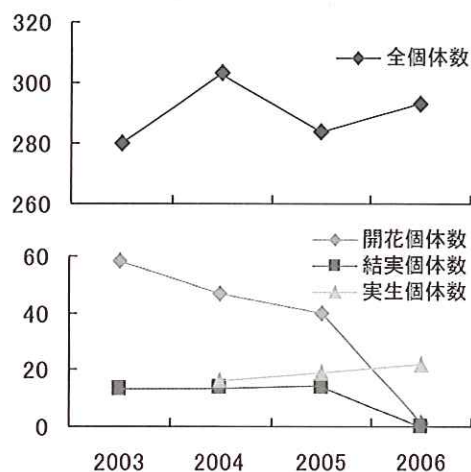
島根県で半自然草地にどれくらいの絶滅危惧種が依存しているのか、県版RDBを用いて評価を試みた。具体的には、表計算ソフトに全文を入力し、「草原」などのキーワードを文中に含む種を抽出した。その結果、鳥類で25%、昆虫で16%、維管束植物で15%の種が該当した。また、書中には各種の生育環境がカテゴリ化されており、維管束植物について環境別の種類数を集計した。集計値自体は森林・林地で多数を占めたが、既存資料から県内の各生育環境のメッシュ数を算出し、メッシュあたりの種数に換算したところ、草原・草地で高い値となり、その重要性を示す指標になると考えられた。



生育環境別のRDB種(メッシュあたり)

### (2) 刈り取り草原におけるRDB種の繁殖状況

刈り取り管理下にある三瓶山北の原草原に調査区を設け、RDB種の繁殖状況について調査を続けている。対象としたRDB種はオキナグサとスズサイコで（県RDBで絶滅危惧Ⅱ類と準絶滅危惧）、前者は刈り取り回数の異なる3箇所、後者は1箇所、開花・結実の繁殖状況、個体サイズとして根際の直径を記録した。オキナグサは、年2～3回刈り取りを行う区と年1回の区に比べ、年間1～2回の区で、個体数・繁殖個体数ともに最も多くみられた。スズサイコは年1～2回刈り取りの区で調査を行った。2006年は年2回の刈り取りが行われたが、過去3ヶ年に比べ開花・結実個体が大幅に減っており、夏季の刈り取りは本種の繁殖にマイナスに働くことが確認された。なお、今回の報告は3年程度の短期間の推移を示しているに過ぎず、引き続いての資料の蓄積が必要といえる。



スズサイコ個体数の推移(40 m<sup>2</sup>中)